大東市埋蔵文化財調査報告第16集

店舗付共同住宅建設に伴う

寺川遺跡発掘調査報告書

―大東市寺川２丁目所在―

２０００年6月

大東市教育委員会

序　　文

本書は大東市教育委員会が平成３年に実施した寺川遺跡の発掘調査報告書であります。

寺川遺跡は本市東部の飯盛山西麓にありますが、今回報告する調査地は現在大阪と奈良を結ぶ幹線道となっている阪奈道路登り線沿いに位置し、古来より河内から大和へ通じる交通の要衝として、多くの歴史が刻まれてきた土地柄であります。それを裏付けるように、今日まで当遺跡内で実施された調査では古墳時代から鎌倉時代の遺構や遺物が見つかっており、各時代の人々の生活の痕跡が至る所に見受けられます。

今回の調査でも、面積が狭少であったにも係わらず古墳時代から中世の遺物が出土し、斜面を人工的に段状に造成した痕跡が見つかりました。今回の調査結果はこれまでの調査結果と合わせて、当遺跡の性格を知るうえで大変貴重な成果を得ることができたものと思われます。

とは言えまだまだ不明な点が多く、このような小規模な調査の積み重ねによって、将来当遺跡の性格が明らかになるであろうと信じております。

最後になりましたが、調査に御協力頂いた木原健吉氏及び関係者各位に対して、厚く御礼を申し上げる次第であります。

平成12年６月

大東市教育委員会

教育長　北　本　慶　三

例　　言

1．本書は木原健吉氏の計画する店舗付共同住宅建設工事に先立つ調査として、大東市教育委員会が実施した同市寺川２丁目547-1 番地所在、寺川遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地調査は大東市立歴史民俗資料館黒田淳を担当者として、1991年11月20日から同年11月30日まで実施した。現地調査と平行して、内業整理作業のうち遺物の洗浄・登録までの作業を行い、終了した。その後作業を一時中断し、1998年５月１日から遺物の注記・接合・実測・写真撮影や報告書掲載の挿図・写真図版等の作成作業を開始し、同年５月24日に終了した。報告書執筆作業は1998年から断続的に行い、2000年５月19日に脱稿し、本報告書の刊行をもって、すべての作業が完了した。

3．本調査に要した費用はすべて木原健吉氏の負担による。記して感謝の意を表する。

4．調査及び整理の実施にあたっては、大谷聡・山田芳樹・上島甲子三・北田享子・野村香枝・宮田八重子諸氏（順不同）の協力を得た。記して感謝の意を表する。

5．本書の執筆編集は担当者が行なった。

6．本書に使用している標高はＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）を方位は座標北を表す。

7．調査において作成した実測図・写真・カラースライド等は大東市立歴史民俗資料館に保管されている。広く利用されることを希望したい。

本 文 目 次

序　　文
例　　言
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査成果 …… 5
　１．層　位 …… 5
　２．遺　構 …… 7
　３．遺　物 …… 8
第４章　ま と め …… 10
報告書抄録 …… 13

挿 図 目 次

第１図　調査区位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第３図　東壁・北壁土層断面図 …… 6
第４図　段状遺構平面図 …… 7
第５図　勾玉実測図 …… 8
第６図　遺物実測図 …… 9
第７図　調査地周辺の地形図（昭和31年） …… 10
第８図　調査地周辺の地形図（明治32年） …… 11

図 版 目 次

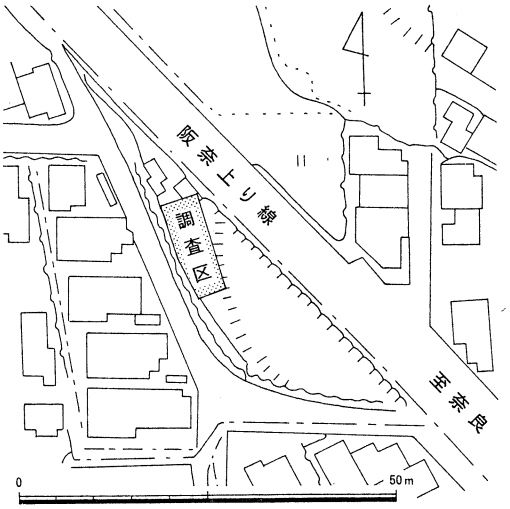
図版１　調査地遠景（南東より）／人力掘削状況（北西より）
図版２　段状遺構検出状況（南東より）／北壁土層断面（南東より）
図版３　弥生土器・土師器・瓦器椀・青磁・白磁／須恵器
図版４　須恵器器台／勾玉

第1章　調査に至る経過

寺川遺跡は大東市寺川2丁目から5丁目にかけて所在しており、以前から田畑の開墾などにより、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器・土師器等が採集される、遺物散布地として周知されていた。1986年には当遺跡の南東部にあたる地点で、共同住宅建設に伴う初の本格的な発掘調査が実施され[(1)]、丘陵斜面上に造られた中世から近世にかけての段状遺構や、奈良時代から中世のものと推定される柱穴等の遺構が検出された。また、1989年にもやはり当遺跡の南部にあたる地点で調査が実施され[(2)]、古墳時代から平安時代中期の自然河川や、平安時代後期から末の段状遺構・柱穴・井戸等が検出されており、古墳時代から中世の遺構が存在している遺跡であることが推定されている。今回の調査地点も当遺跡の南部に位置しており、調査地の地番は寺川2丁目547－1番地である。（第1図）

今回の調査に先立ち、1989年5月17日付けで木原健吉氏より同地番内で駐車場設置のための人工地盤建設の旨届け出があり、これを受けて本市教育委員会では同年10月20・21日に工事立会調査を実施しており、当該地では古墳時代から中世の遺物包含層と、それに伴う遺構が存在する可能性の高いことを既に確認していた。将来的な計画では人工地盤に隣接して建物を建てるということであったので、その時には事前に試掘調査を実施し、その結果次第では発掘調査の必要な場合も有りうることを説明し、同氏に了解をしてもらった。

その後、1991年10月22日付けで同氏より店舗付共同住宅建設の旨届出があり、これを受けて本市教育委員会が1991年11月15日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下40cmから約1mまでの間で、古墳時代から鎌倉時代にかけての土器を含む遺物包含層が確



第1図　調査区位置図

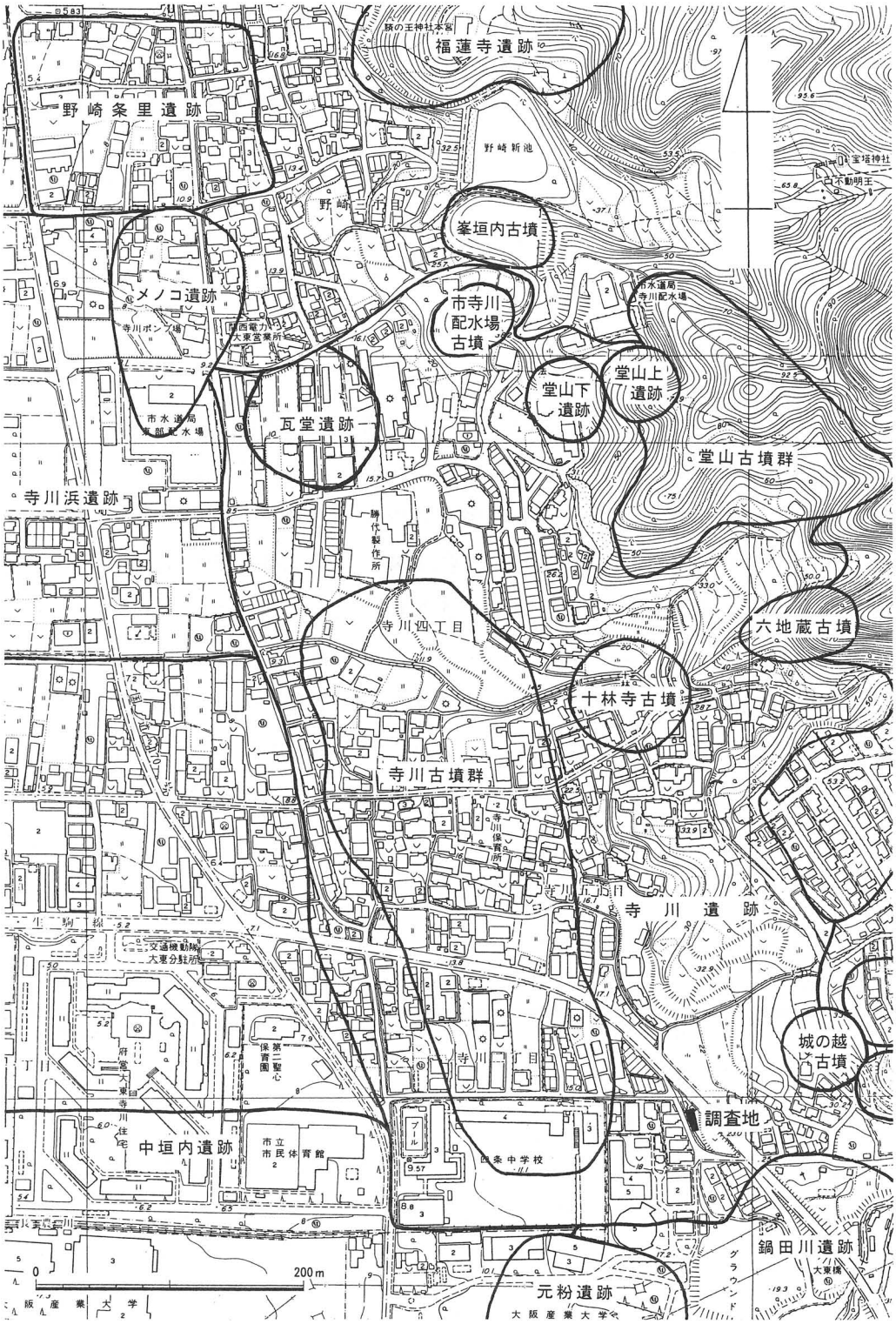
認され、当初の予想通り遺構の存在する可能性が非常に高いことが判明したため、事前に調査が必要である結論に達した。以後、この試掘調査の結果に基づき協議を重ねた結果、同氏の理解協力を得ることができ、発掘調査を実施することになった。

現地での作業は1991年11月20日より開始し、同年11月30日に終了した。

第2章　位置と環境（第2図）

寺川遺跡の所在する大東市は河内平野の北東部に位置している。本市の地勢を概観すると、東側約3分の1が山地で、生駒山系の支脈である飯盛山（標高314.3m）が南北に横たわっている。山塊からは西側に向かって標高50～200mの尾根が舌状に張り出しており、その先端には緩やかな丘陵地形が形成されている。地質的には一部大阪層群がみられるが、主に領家花崗岩類から成っている。標高5～50mを測る丘陵裾野には、山地から流れ出す中小河川により小規模な谷口扇状池が形成されており、緩やかに傾斜をしつつ平野部へと続いている。地勢の約3分の2を占める平野部は砂・シルト・粘質土等の沖積層から成る。これらの沖積層は縄文時代中期頃の海進現象によって生駒山麓際まで海水が入り込み河内湾が形成され、そこに流れ込む旧大和川や寝屋川、そして前述の山地から流れ出す中小河川等の諸河川の堆積作用によってもたらされたものである。これらの堆積作用により、河内湾は古代から近世初頭にかけて潟から湖、池（深野池・新開池）へとその姿を変えていった[(3)]。そして、近世中頃の大和川付け替え工事（1704年）が契機となり、市域では深野池の干拓と新田開発が行われた結果、ほぼ現在に近い景観となった。

寺川遺跡は飯盛山から西へ派生する尾根の先端部である丘陵地と、鍋田川・長農川・寺川中川等の中小河川よって形成された小規模な扇状地上に立地しており、標高は約9～60mを測る。飯盛山の西麓は市域のなかでも特に遺跡が集中しているところで、南の東大阪市境界から北は四条畷市境界に至るまで、古墳を含む多くの遺跡が存在している。当遺跡は現在のところ推定で東西500m、南北750mの規模で広がっているが、周辺やその範囲と重複するように、各時代の遺跡や古墳が存在している。



第２図　周辺の遺跡分布図

縄文時代では鍋田川遺跡[4]で中期から後期の、中垣内遺跡[5]で後期の土器が出土している。今のところ明確な遺構は検出されていないが、縄文時代集落の存在が推定される。

弥生時代では中垣内遺跡[6]において前期から中期にかけて集落が営まれていたことが確認されているほか、野崎条里遺跡・北条西遺跡においても前期の土器が出土しており、これまで周知されていた中垣内遺跡や四條畷市雁屋遺跡以外にも、河内潟縁辺部に立地し前期から営まれていた集落の存在が推定できる。後期になると、丘陵地に立地する各遺跡からの出土遺物が多くなり、当遺跡内の北にある堂山古墳群[7]では丘陵地に掘られた溝が検出されている。

古墳時代では中垣内遺跡[8]で前期の集落跡が確認されており、鍋田川遺跡[9]では前期に属する土師器とともに、滑石製有孔円板・卜骨・刻骨等の祭祀色の濃い遺物が出土している。中期になると、各遺跡では韓式系土器や陶質土器・初期須恵器といった渡来系の人々に関連する遺物の出土が目立つようになり、メノコ遺跡[10]では鳥足文を施した土器が出土し、鍋田川遺跡・堂山下遺跡[11]では格子タタキ文の韓式系土器が採集されている。また、当遺跡内及び近隣には堂山古墳群・峯垣内古墳（遺跡[12]）・六地蔵古墳[13]・十林寺古墳[14]・城の越古墳[15]・城の越上の段古墳[16]・大谷神社古墳[17]・寺川古墳群[18]・大谷古墳群等があり、これらの古墳の造営基盤となる集落の存在が推定される。前述したこれらの古墳のうち堂山古墳群[19]は発掘調査が実施されており、第１号墳が中期で、他は後期に属していることが判明している。特に１号墳からは、三角板皮綴短甲・衝角付冑・鉄刀・鉄鏃等の多量の武器・武具類が出土しており、首長墓的な様相を備えた古墳といえる。その他の古墳は発掘調査を経ないまま消滅したものもあるが、採集された遺物から後期古墳と考えられている。なお、現在のところ市域では前期古墳の存在は確認されていない。

奈良時代では当遺跡[20]で古墳時代終末から奈良時代前半と推定される掘立柱建物が検出され、瓦堂遺跡[21]では同時期の（飛鳥～白鳳期）の布目瓦が出土している。今のところこの時代の集落の内容・性格は、明らかになっているとは言えないものの、自然河川内からではあるが、「白麻呂」・「栗（粟？）」の墨書の入った須恵器[22]が出土していることから、通常の集落とは性格の異なる、官衙的な施

設の存在も推定されている。

平安時代から鎌倉時代では当遺跡内[23]でこの時期の遺構が確認されており、引き続き集落が営まれていたことが推定される。

また、当遺跡の背後にある飯盛山には、戦国時代に三好長慶の居城となった飯盛山城が存在していたことが知られている。そして同じ頃、西方の深野池に浮かぶ島には三箇城の存在が伝えられている。三箇城はキリシタン大名として知られる三箇サンチョの居城で、当時の文献等[24]にはしばしば散見されるのであるが、現状では発掘調査による具体的な知見は得られていない。

このように、寺川遺跡及びその周辺は古代から中世にかけての遺跡が数多く存在しており、これはかつて当地域が生駒山西麓部を南北に走る古道（東高野街道）と、生駒山を越えて大和へ通ずる古道（中垣内越）とが交差する交通の要衝であったことを物語っている。

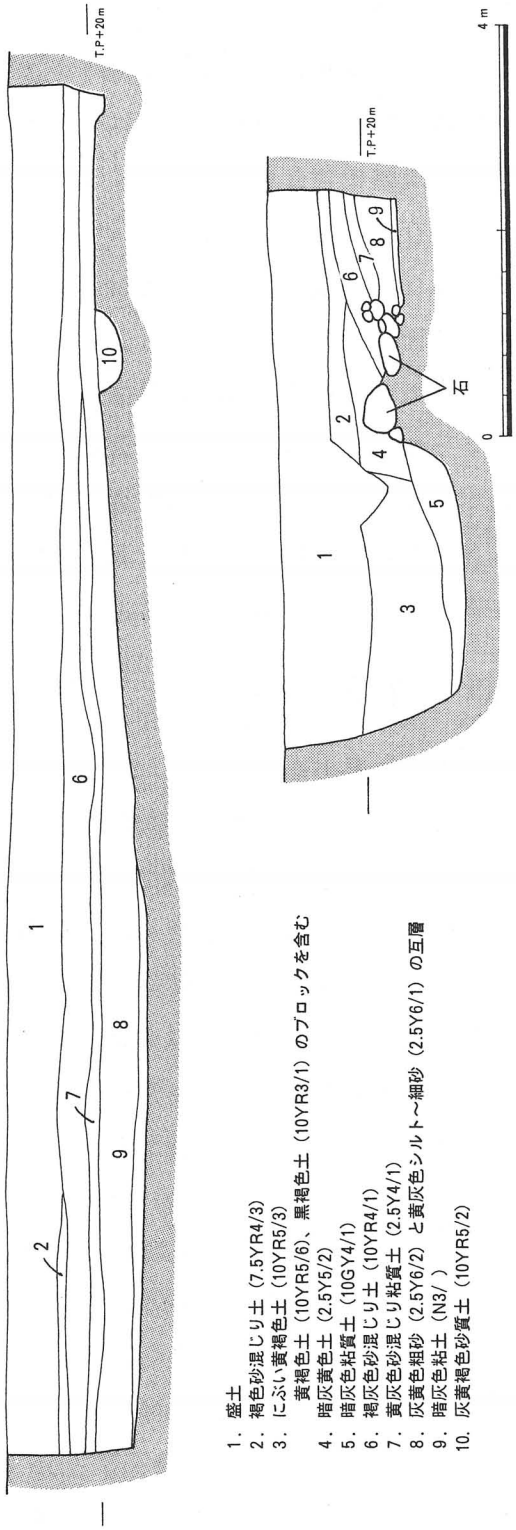
第3章　調査成果

調査地点は飯盛山から派生した尾根の先端部である緩やかな丘陵上に位置しており、その南西斜面に造られた棚田のうちのひとつであった。標高はT.P.＋20.3m前後を測る。調査地周囲の地表面はすぐ北側を走る主要地方道大阪生駒線（阪奈道路登り線）の道路面よりも約1.6～1.8m低く、盛土がほとんどなされていないようであり、道路建設時の影響をあまり受けていない様子であった。したがって、比較的原地形をとどめていることが推定され、このため地表には須恵器や土師器等の遺物が散在する状況であった。ただ、調査地点だけは先立って行われた人工地盤建設工事の影響で、盛土がなされていた。

1．層　位（第3図）

調査地の表土は人工地盤建設時の盛土（1層）で、層厚は40～80cmを測り、調査区の西側で厚く堆積している。盛土の下には褐色砂混じり土（2層）が堆積する。本層は盛土がなされる前の地表面であった水田耕作土であるが、盛土時に行われた整地のため、調査区の北東隅でしか見ることができない。その下にはにぶい黄褐色土（3層）・暗灰黄色土（4層）・褐灰色砂混じり土（6層）が堆積している。調査で検出した段状遺構を覆うように堆積しており、4・6

層は段状遺構上段に、3層は下段に堆積する。3層には黄褐色土や黒褐色土がブッロク状に混入しており、下段が人為的に埋め戻されたことを示している。3・4層には古墳時代から中近世の遺物が含まれており、6層には古墳時代から中世の遺物が含まれている。6層の下には黄灰色砂混じり粘質土（7層）・灰黄色粗砂と黄灰色シルト～細砂の互層（8層）が順に堆積している。これらの層は段状遺構の基盤層となっており、段が造られる以前、斜面上に形成された自然堆積層と考えられる。主に古墳時代後期から奈良時代の遺物が含まれている。3・4層の下には滞水性の堆積層である暗灰色粘質土（5層）が堆積しており、古墳時代から鎌倉時代の遺物が含まれている。上段の最下層で確認した暗灰色粘土（9層）には遺物は含まれておらず、地山の土と考えた。本層は土層断面図には表れていないが、5層の下にも堆積している。10層の灰黄褐色砂質土は9層上面で検出した溝状の遺構の埋土

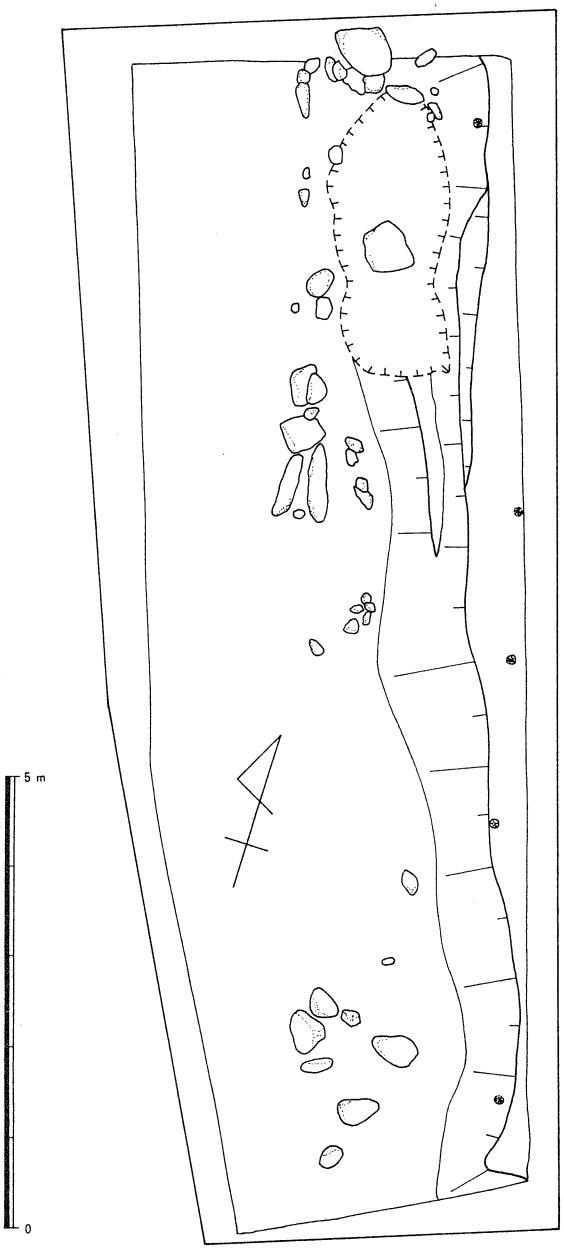


第3図　東壁・北壁土層断面図

であるが、遺物は含まれていない。人為的な遺構ではなく、自然流路と考えられる。

2．遺　構（第４図）

遺構は北東から南西方向の傾斜地に造られた段状遺構を検出している。段はN－20°－Wの方向で検出され、それぞれ調査区の北側・南側へと連続している。段の高低差は約0.5～0.6mを測る。東側の上段には段と同じ方向で、径約５～７㎝程度の杭を打ち込んだ杭列が検出された。杭の間隔は1.6～4.3mを測り、その間隔にはばらつきがあるものの、消失したものも考慮に入れると、かつては２m前後の間隔で打ちこまれていたものと推定される。西側の下段には15～40㎝大の花崗岩の割り石が散在しており、これらの石も段に沿うように検出された。これらの石は検出状況から、かつて段に沿うようにして積まれていた石が崩落したものであると推定される。また、層位の項でも述べたように、下段の埋土の最下層には滞水性の暗灰色粘質土が堆積していたので、下段はかつては水路的な形態をしていた



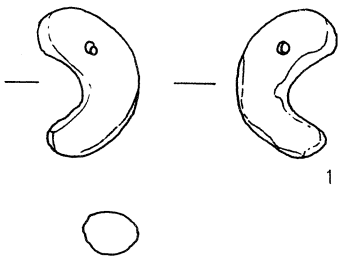
第４図　段状遺構平面図

ものと推定される。遺物は上段の基盤層には中世のものは含まれず、古墳時代から奈良時代の須恵器や土師器が出土しており、下段の最下層から弥生時代から中世の遺物が出土している。

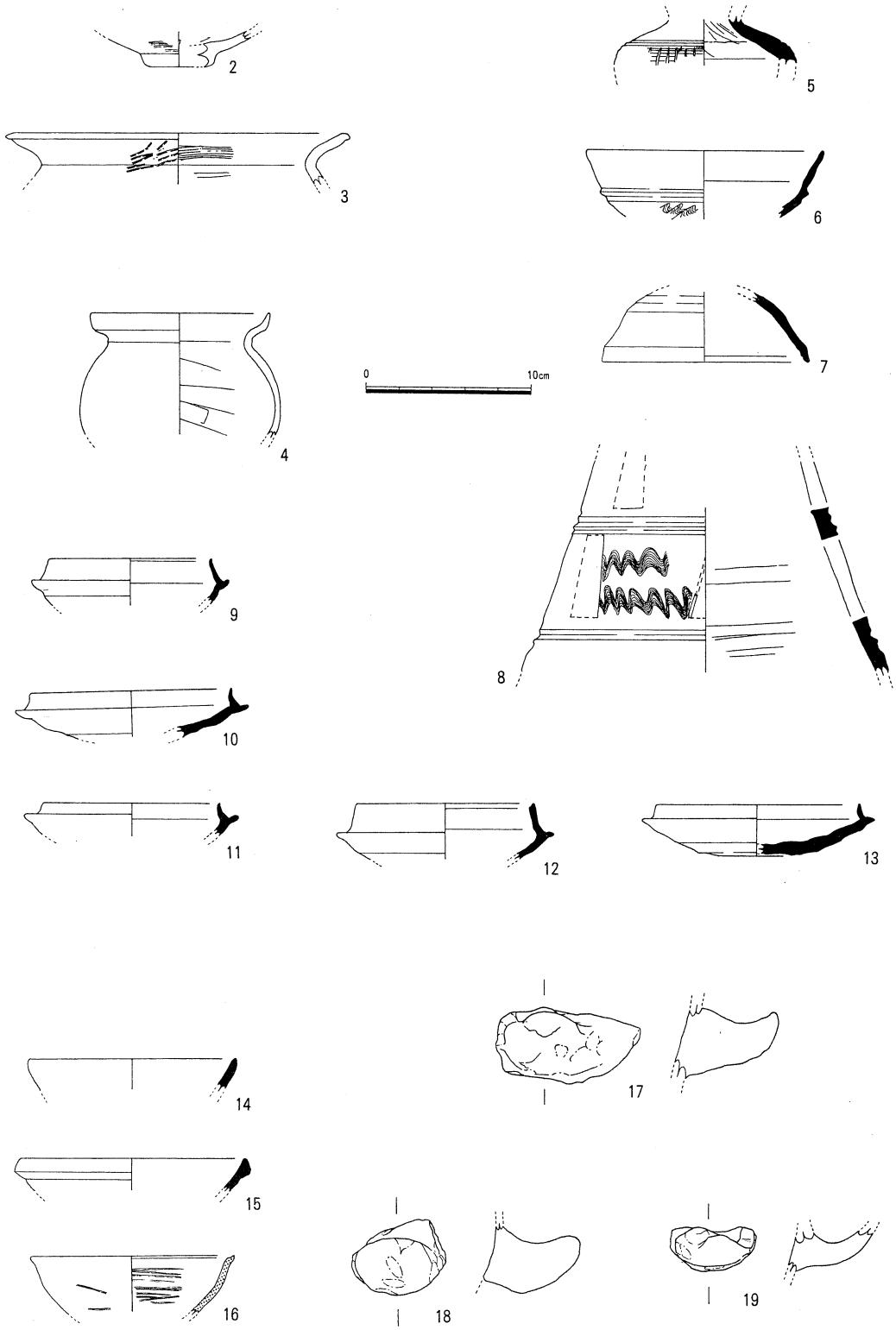
3．遺　物（第5・6図）

出土遺物は小片のものが多く、このため図化できたものは少数である。

1は滑石製勾玉で、角ばった面を持たず、全体に丸味を帯び滑らかに仕上げられている。試掘時の出土遺物のため、出土層位は明らかではない。2は弥生時代後期の甕の底部片で、摩滅が著しいが、外面には底部付近までタタキが施されているのが観察される。5層から出土している。同じく3は甕の口縁部片で、外面には肩部から口縁部にかけてタタキが、内面はナデが施されている。6層から出土している。4は古墳時代後期の壷で、摩滅が著しいが、内面にはナデが施されている。6層から出土している。5は須恵器壷の体部破片で、肩部に沈線が施され、櫛描き文と同一原体による刺突文が施されている。4層から出土している。6は脚部を欠くが、須恵器無蓋高杯である。外面の口縁部下に突帯を有し、その下に波状文が施されている。4層から出土している。7は須恵器杯蓋で、天井部を欠き、外面は丁寧にナデ仕上げられている。7層から出土している。8は須恵器器台の脚部片である。突帯の間に2条の波状文が施され、方形或は台形の透かしが施されていたものと推定される。8層から出土している。9～13は須恵器杯身である。9は6層から、10・11は4層から、12は7層から、13は5層からそれぞれ出土している。14は青磁碗口縁部、15は白磁碗口縁部である。15は玉縁状口縁を呈している。いづれも5層から出土している。16は瓦器椀口縁部で、大和型である。3層から出土している。17～19は土師器把手の一部である。17・18は牛角状を呈しているが、19は厚みの少ない形状をしている。いづれも7層から出土している。



第5図　勾玉実測図(原寸)



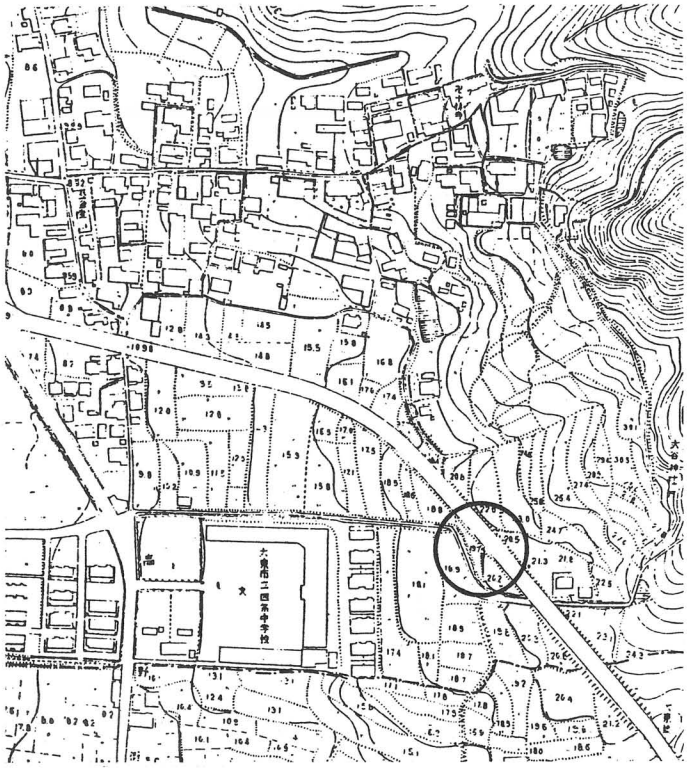
第６図　遺物実測図

第4章　ま　と　め

これまで述べてきたように、調査地点は飯盛山から派生した尾根の先端部である緩やかな丘陵の南西斜面に位置しており、それは昭和31年の地形図[25]（第７図）や、明治32年の地形図[26]（第８図）からも読み取ることができる。

今回の調査ではこの斜面上に人為的に造られた段状遺構を検出した。その形態は上段側に杭を打ち込み、段に沿って花崗岩の割り石を積んでいたものと推定される。ただ、今回の調査では両者が同時期のものかどうかを断定する明確な根拠は得られていない。また、下段に堆積した最下層の土は暗灰色粘質土で、水が流れていた様相を示しているので、かつて段・石積みに沿うようにして水路的なものが存在していたことが推定される。

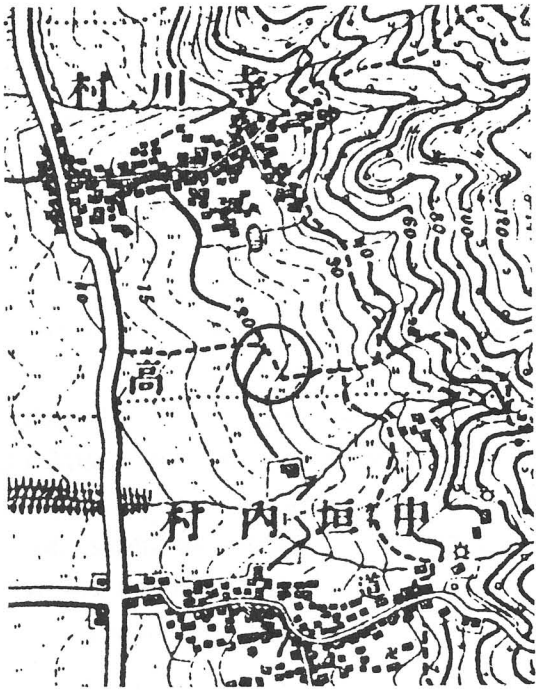
現在、調査区の西側には南東から北西方向に水路が流れているが、検出された割り石と段の方向はこの水路と平行しているので、以前は下段にこの水路が流れていたものと考えられる。現在の水路は調査区と平行して流れ、下流で東西方向に流れを変えて四条中学校の北側を通り、その後南下して長農川となって西流している。明治32年の地形図には水路としてではなく道として表されているが、この道にそって水路が存在していたものと推定され、段と水路は近世以前からこの形態で存在していたものと考えられる。



第７図　調査地付近の地形図（昭和31年）　S＝$\frac{1}{5000}$

段と水路の造られた時期であるが、段の基

盤層には中世の遺物は含まれていないが、下段の埋土の最下層には中世の遺物が多く含まれており、最下層からの出土遺物が段の形成時期に近い時期を示しているものとすると、中世（鎌倉時代頃）と推定される。当調査区の周辺では平安時代末には集落が営まれていたことが判明していることなどから、[27] それと近い時期の開発によることも考えられるが、今回の調査結果だけでは時期を限定することは困難であり、時間的な幅をもたせて、中世以降から近世の間としておきたい。一方、段を覆う土からの出土遺物には近世の遺物が含まれているので、段は近世以降に埋められ調査前の形状になったものと考えられるが、水路だけは西側に移設され残されたのであろう。



第８図　調査地付近の地形図（明治32年）

$S = \frac{1}{10000}$

また、段の性格については他に遺構を検出していないため不明であるが、当遺跡内では斜面上に造られた同形状の段状遺構が検出されており、付近には「城の越」という小字名が存在していることからも、中世頃の山城に関連する遺構の可能性もありうることを視野に入れ、今後の調査の課題としたい。

このように、今回の調査では古代以降当地域がどのように開発されてきたのかを考えるうえで、貴重な成果を得ることができたと言える。

註）

(1) 『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987　大東市教育委員会

(2) 『寺川遺跡発掘調査報告書』1997　大東市教育委員会

(3) 梶山彦太郎・市原実『大阪平野の生たち』1986　青木書店

(4) 『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』1991　大東市教育委員会

(5) 『中垣内遺跡発掘調査報告書』1997　大東市教育委員会

(6) 『中垣内遺跡発掘調査報告書』1990　大東市教育委員会

『中垣内遺跡現地説明会資料』1992　大東市教育委員会

(7) 『堂山古墳群発掘調査概要』1973　大阪府教育委員会

『堂山古墳群』1994　大阪府教育委員会

(8) ※　1986年に実施された大阪産業大学校舎新築工事に伴う発掘調査で検出している。

(9) 『大東市史』1973　大東市教育委員会

※　大阪府教育委員会による鍋田川改修工事に伴う発掘調査では河川の二次堆積ではあるものの、縄文時代から中世に至る遺物が出土している。

『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1992　大阪府教育委員会

『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1994　大阪府教育委員会

(10) 『メノコ遺跡発掘調査報告書』1998　大東市教育委員会

(11) ※　『大東市史』では縄文時代早期の押型文土器として掲載されているが、韓式系土器の誤りである。

拙稿「鍋田川遺跡」『韓式系土器研究Ⅱ』1989　韓式系土器研究会

(12) 河内一浩「大東市の埴輪」　前掲の(1)に所収。

(13) (12)に同じ。

(14) ※　前方後円墳と伝えられるが、定かではない。また、石棺が出土したとも伝えられる。

(15) ※　円筒埴輪が出土したと伝えられる。

(16) ※　円墳で石棺が3基出土したと伝えられる。

(17) ※　勾玉が出土。

(18) ※　石棺、円筒埴輪、土師器、須恵器が出土。

(19) (7)に同じ。

(20) (4)に同じ。

(21) (9)に同じ。

(22) (2)に同じ。

(23) (2)に同じ。

※　(1)・(2)・(4)の調査の他、1996年には当調査区とは阪奈道路を挟んだすぐ北側で、大阪府教育委員会、大東市教育委員会がそれぞれ発掘調査を実施している。

『寺川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1997　大阪府教育委員会

(24) ルイス・フロイス『日本史』

(25) 昭和31年大東市発行3000分の1都市計画図「大東市全図　其二」より作成。

※　既に調査区の北側には阪奈道路の一部が造られているが、当時の周辺の地形がよくわかる。阪奈道路の全線開通は昭和33年である。

(26) 明治32年陸地測量部発行2万分の1地形図「生駒山」より作成。

(27) (2)に同じ。

報　告　書　抄　録

ふりがな	てらがわいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	寺川遺跡発掘調査報告書
副 書 名	店舗付共同住宅建設に伴う ―― 大東市寺川２丁目所在 ――
巻　　次	――――――――――――――――――――――――――――――
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第１６集
編集者名	黒　田　　淳
編集機関	大東市教育委員会大東市立歴史民俗資料館
所　在　地	〒574-0037 大阪府大東市新町13番30号 ☎ ０７２－８７３－３５２１
発行年月日	２０００年（平成12年）６月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
寺川遺跡（てらがわいせき）	大阪府（おおさかふ） 大東市（だいとうし） 寺川（てらがわ）２丁目 547-１番地	27218	33	34度 42分 21秒	135度 39分 02秒	1991年 11月20日 ～ 1991年 11月30日	86㎡	店舗付 共同住宅建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺川遺跡		弥生時代		弥生土器	後期の甕
		古墳時代		須恵器、土師器	
		奈良時代		須恵器、土師器	
		中世 ～ 近世	段状遺構・溝	須恵器、土師器 瓦器椀、青磁、 白磁	杭列・石積み 水路の跡 中世～近世の城廓 との関連？

図　　版

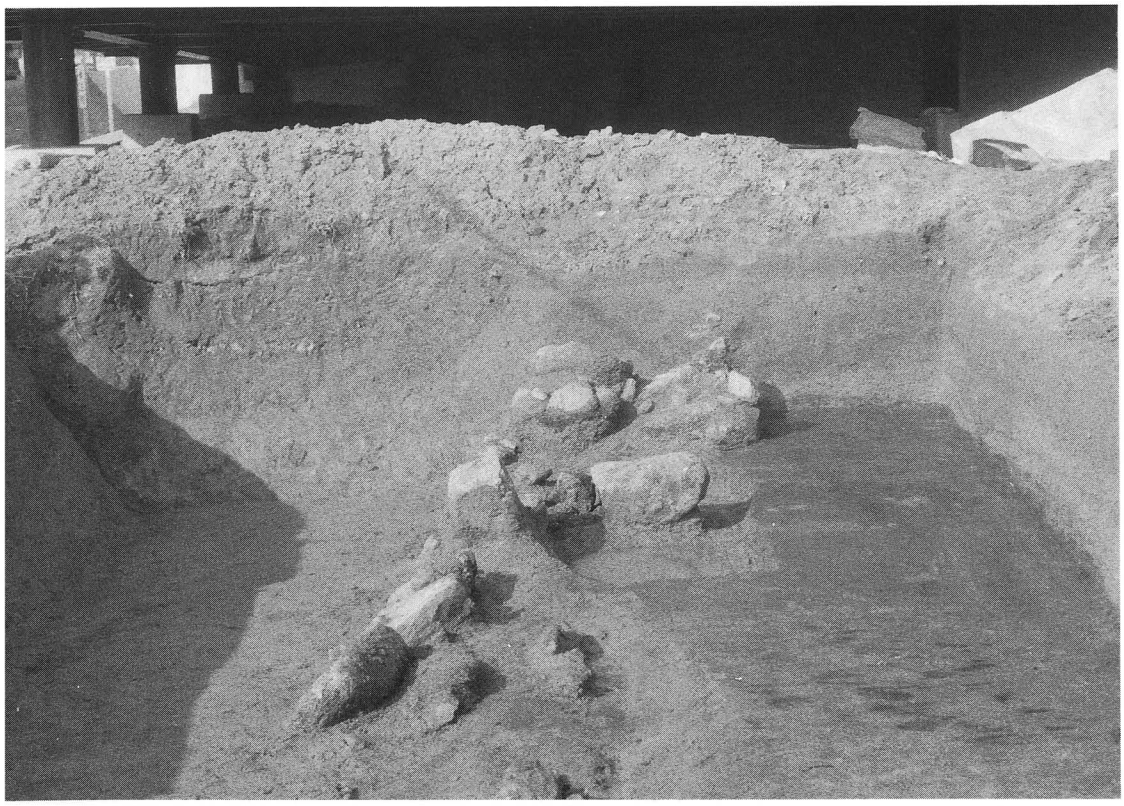
図版1

調査地遠景（南東より）

人力掘削状況（北西より）

図版2

段状遺構検出状況（南東より）



北壁土層断面（南東より）

弥生土器・土師器・瓦器椀・青磁・白磁

須恵器

須恵器台

勾玉